

## 第五節 宗教と文化

### 一 宗 教

#### 寺院

当町域の寺院としては『芸藩通志』に熊野村の浄土真宗光教坊・西光寺の二か寺をあげ、ほかに廃寺として同村新宮の十林寺を記している。

安芸国では主として戦国時代に真宗の布教が強力に進められ、天台・真言宗などの旧宗派からの改宗が顕著である。江戸時代後期、一九世紀初ごろ広島城下・宮島・豊田郡を除いた各郡では真宗寺院が過半数を占め、安芸国全体では六〇二の寺院中三五一か寺は真宗であった光禪寺文書「寺院系譜」文化ごろ。なかでも安芸郡では郡内三八か寺のうち真言二、禅宗二を除いた三四か寺はすべて真宗寺院で、真宗の影響の強い地域であったといえる。当域への浄土真宗の伝播については不詳であるが、近世以前の旧在地領主の没落や真宗布教の浸透により旧宗派寺院は廃絶あるいは改宗に至ったものと思われる。

江戸時代には主としてキリスト教禁教により宗門改め・キリシタン類族改め・寺請などの諸制度が実施されている。このため必ず町民・農民はいずれかの寺院の檀家となることが義務づけられており、当町域では熊野村の二か寺のほかに、平谷・川角村では矢野村長慶寺(浄土真宗本願寺派)の檀家となるものが多く、さらに熊野村新宮地域では隣村熊野跡村の専立寺(浄土真宗本願寺派)を檀那寺としているものもあつた。このほか川角村では広島城

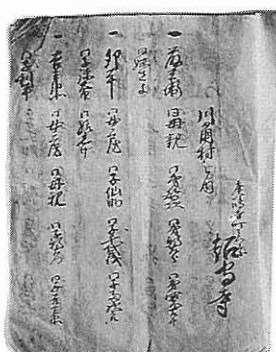
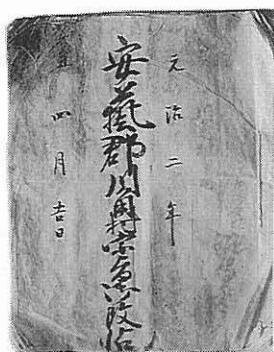


図4-5-1 「安芸郡川角村宗旨御改帖」(元治2年)

下寺町の超専寺・真行寺・光園寺(いずれも浄土真宗弘護寺十二坊の一)の門徒となったものもあつた織田家文書、元治二年「安芸郡川角村宗旨御改帖」。寺院と檀家の結びつきは密接なもので、寺は檀家の婚姻・奉公・移住はもちろん旅行のさいにも、寺請証文・宗門放手形・宗門請手形などを発行するなど行政的な役割を果たしている。また檀家は葬式や法事・報恩講や盂蘭盆会などの宗教行事には檀那寺の僧侶を招いたり、寺へ参詣し、さらに檀那寺の建立・修覆や僧侶の得度・修行および寺格の昇進・本山への寄進に至るまでの多額の諸費用を負担しなければならなかった。

熊野村では文政十年(二八二七)光教坊本堂再建のさい、村辻(村費用)として村民への負担がかけられており、萩原九七人、呉地四六人、城之堀一四一人、初神七八人、新宮原四五人、出来四七人、中溝三九人の計五一〇人、四貫三〇九匁五分の取替がされている佐々木家文書、同年「光教坊再建」付村辻取替算用帳。また同年の奉加帖によれば村辻からの借銀は皆済されており同家文書、同年「光教坊御堂辻借皆済奉加帖」、四年後の天保二年本堂瓦葺替入用奉加銀請払帖同家文書、同年「光教坊御堂瓦替入用奉加銀請払帖」などの負担があつた。

次に当域の二寺について概略をあげる。

### 光教坊

永禄年中(二五五八)に僧浄基が開基したと伝え「雲庵通志」、また同寺の「縁起書」によれば前身は鎌倉時代かげきに石嶽山山上に真言宗「石山寺」として建立されたものという。のち薬師如来を熊野に移して本尊

とし、嵩山城主菅田豊後守の菩提寺となったが、天文年間（一五三一—一五四）同氏の滅亡により寺も焼失した。その後永禄年中（一五五八—一六九）に和田七郎左衛門が出家し浄喜と号し、浄土真宗に改宗、超福寺の開基となった。寛永六年（一六二九）、二代浄専の時に坊号を許可され、以後「石嶽山光教坊」と称したという。なお同坊は本願寺派に属し、広島城下の寺町光福寺の末寺であった〔知新集〕卷三〇。

### 西光寺

同寺の由緒については、天明八年（一七八八）の火災により記録を焼失したと伝え、詳かでない。当初は真言宗寺院であったが、のち永禄十年（一五六七）旧〔広島縣史〕社寺志あるいは慶長六年（一六〇一）に祐乗が開基したという〔雲藩通志〕本願寺派に属し、広島寺町の円竜寺の末寺であった〔知新集〕卷三〇。



図4-5-2 光教坊

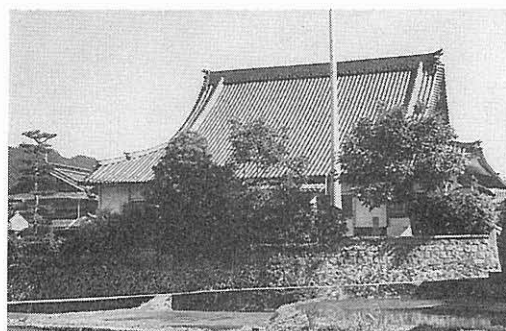


図4-5-3 西光寺

### 仏堂

旧宗派の系統をひくものが多く、戦国時代に庇護者の没落などで衰微し、寛文五年（一六六五）幕府の「諸宗寺院法度」による寺院の格付と統制が行われたさい、届出のない寺は寺院と認められず堂とされたものである。

当域の仏堂は表4-5-1のようである。

### 神社と小祠

当域の神社と小祠については表4-5-2の

表4-5-1 町域の仏堂

所在地	名称	本尊	由緒など
熊野村	阿弥陀堂	阿弥陀如来	天文15年(1547)以前に建立
〃 中溝	ゆるぎ観音堂	観世音菩薩	慶応元年(1865)水木嘉右衛門ら建立
〃 萩原	石嶽山観音堂	三鬼・弥山・ 金比羅権現	鎌倉時代に開山と伝える
〃 城之堀	不動院	不動明王	文化3年(1807)再建棟札あり
〃 初神	薬師堂	薬師如来	永正11年(1514)椛次郎左衛門建立
〃 新宮	毘沙門堂	毘沙門天	
川角村	积迦堂	积迦如来	享保5年(1720)建立



図4-5-4 熊野本宮

ようである。このうち主な神社について概略を掲げる。

熊野本宮・新宮社

熊野村の村名由来と

なったともいわれる神社である。

社伝によれば平安末期の養和元年

(一一八一)ごろ、紀州の熊野本宮

社より勧請したと伝えている。下

って天文四年(一五三五)、毛利家

家臣赤川源左衛門・児玉若狹・渡

部新左衛門より神田の寄進が行わ

れ〔雲藩通志〕、ついで同二十四年毛利氏より社禄五斗が寄進され、その後福島

氏により没収されたが浅野氏により再び寄進が行われた。寛政十二年(一

八〇〇)、火繩をくわえた鶴が社殿に飛び込んだため同社は焼失し、神体

も中絶したと伝える。のち再び紀州より勧請が行われた。

神山神社

明治までは大宮八幡宮と称した。社伝によれば、承平三年(九三三)九州宇佐八幡宮より勧請と伝える。熊野本宮社な

どと同じく天文四年赤川等より寄進が〔雲藩通志〕、同二十四年毛利氏より五石

表4-5-2 町域の神社・小祠

村名	字名	地名	神社・小祠	祭神	由緒
熊野村	呉	地	八幡神社	帶中津日子命 品陀和氣命 息長帶比売命 皇帝神	応永三年（一三九六）又は天授年間（一三七五） 勸請 呉地古宮ともいう。 勸請年代不詳
〃	出	来	皇帝神社	皇帝神	勸請年代不詳
〃	中	溝	大歳神社	大歳主神	享保六年（一七二一）勸請
〃	〃	〃	佐太夫神社	梶山佐太夫	享保六年創建
〃	〃	〃	神山神社	帶中津日子命 品陀和氣命 息長帶比売命	承平三年（九三三）宇佐八幡宮より勸請 大宮八幡宮ともいう
〃	〃	〃	神谷神社	市杵島姫命	
〃	〃	〃	熊野本宮新宮社	伊邪那岐命 伊邪那美命	養和元年（一八一）紀州熊野神社より勸請
〃	〃	〃	諏訪神社	建御名方命	長祿元年（一四五七）信州諏訪神社より勸請
〃	〃	〃	稻荷神社	宇迦之御魂命	勸請年代不詳
〃	〃	〃	白石神社	〃	〃
〃	〃	〃	牛神神社	〃	〃
〃	〃	〃	龍王神社	弥都波能売命	元和元年（一六一五）ごろ勸請
〃	〃	〃	萩原神社	弥都波能売命 ほか	享保五年勸請
〃	〃	〃	土岐神社	岡象女命	〃
〃	〃	〃	胡子神社	事代主命	享保六年勸請
〃	〃	〃	皇城神社	埴安姫命	〃
〃	〃	〃	牛神社	天手雄命	勸請年代不詳

平谷村	川角村	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
		〃	〃	新宮	〃	〃	初神	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	城之堀
殿島神社	的場神社	貴船神社	竜王神社	若宮神社	榊森神社	三谷神社	牛守神社	初神神社	大元神社	〃	稻荷神社	大歳神社	〃	殿島神社	小倉神社	稻荷神社				
市杵島姫命	大山祇命 品陀和氣命	高麗神 品陀和氣命	弥都波能売命	奥津彦命 大國主命 宇迦之御魂命	速理姫命 菊理男命 事解男命	素盞鳴命 素盞主命 大國主命	宇迦之御魂命 少名彦命 ?	宇賀之御魂命 大國主命 大歳神	〃	〃	市杵島姫命	岡象女命	宇迦之御魂命							
勸請年代不詳、明神社ともいう	天正九年（一五八一）勸請、平谷八幡宮ともいう	勸請年代不詳	勸請年代不詳	勸請年代不詳、榊森神社遷座のあとに勸請	新宮大明神ともいう	勸請年代不詳、嘉元年中（一三〇五）遷座	〃	初神神社境内社	享保六年勸請	勸請年代不詳	享保六年勸請	享保五年勸請	享保三年勸請	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

『芸藩通志』旧『広島県史』『社寺志』などによる



図 4—5—5 柳山神社

の寄進があったが、福島氏により没収された〔柳山神。社文書〕。正徳五年（一七一五）に火災にかかり記録を失ったため詳細は不明である。その後社殿は享保九年（一七二四）、拜殿は慶応四年（一八六八）に再建された。この神社では「弘治二年祈願に付踊申候」〔年中事。物目録〕と記されるように早くから虫害撲滅祈願を行い、その祈願ほどきとして踊を奉納したことから神楽踊が行われ、また毎年正月には氏子に神札を配布するなど地域とのつながりが密接であった。七月十五日祭礼。

#### 榊森神社

熊野村新宮地域にあり、もと土岐城主高根某の鎮守とされ、同氏滅亡後小祠となっていたが、嘉元ごろ（一三〇三）または元亀ごろ（一五七〇）に現在地に移されたという。新宮大明神ともいわれる。

#### 貴船神社

「川角村きふね山にあり」〔芸藩。通志〕とあり、鎮座の時代不詳。万治四年（一六六一）、洪水により社殿が流失したため、寛文三年（一六六三）貴船山に遷座した。その時その地に祀られていた高麗神を合祀。祠官は矢野村尾崎神社香川氏。

#### 的場神社

「平谷村的場畝にあり」〔芸藩。通志〕。勧請年代不詳。天正九年（一五八一）平谷村が隣村押込村の梶山新左衛門・仏垣内某などによって開かれたとき、梶山新左衛門により平谷八幡宮が造られ押込村の八幡宮が勧請され〔香川家文書。棟札帖〕、その平谷八幡宮が元禄十五年（一七〇二）的場山に遷座し社名となった。慶長二年（一五九七）、貞享四年（一六八七）社殿を造営、その後正徳四年（一七一四）の大風により破損したため再び造営、享保二十



図4-5-6 榊森神社



図4-5-7 貴船神社



図4-5-8 的場神社

年(一七三五)・延享二年(一七四五)にも造営が行われた。

## 二 文化と教育

### 俳句・和歌

近世中期以降、広島城下を中心として在町・在郷市などの町屋に住居する人たちには、和歌や俳句を嗜み、儒学や国学を学ぶものがみられるようになり、また地方の上層農民にもそのような風潮が広まった。熊野盆地に接する地区、南方の矢野村、北東方の黒瀬川流域、西方の郡元である海田市や隣接奥



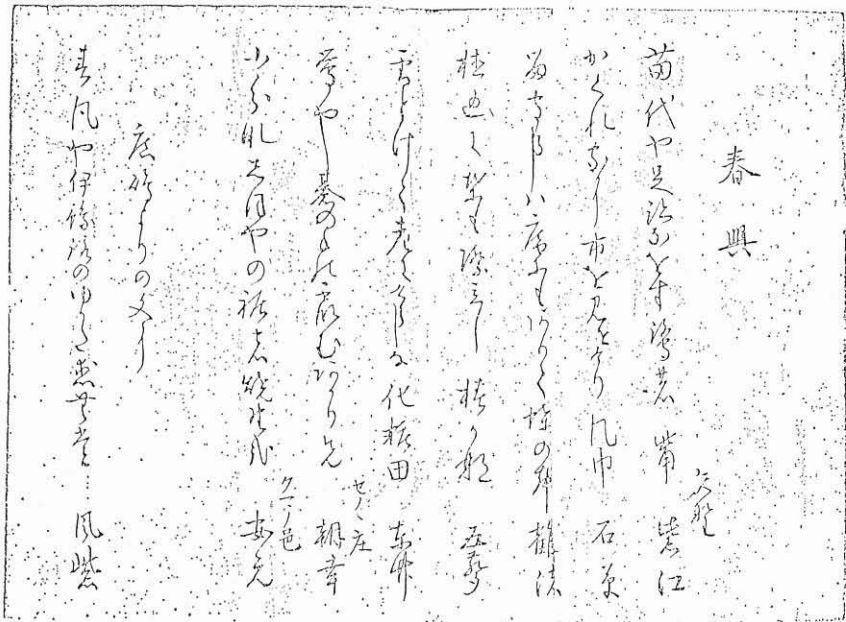


図4-5-9 寛政年間の摺物「春興」（下垣内和人氏蔵）

海田村など、文芸的な教養を身につけた人たちが、かなり多くみられた下垣内和人著『雲』、備前譜史の研究。しかし、仁保嶋村・府中村について、安芸郡内第三位の石高をもつ熊野村や、平谷・川角などの小高の村々にも、文化的な活動はあまり行われなかったようである。その中において、春興と題する摺物（一枚）に矢野の俳人東竹（宇都宮光信、天明ころの人）ら五名、それに瀬野庄の朝幸と名をつらねて、熊野邑の安之が、「小分川しほやの裾の焼野哉」とよんでおり、末尾に広島風の風紫（松栄寺住職、寛政八年没）の句がみえる。また広島筵史編「夢のあした」（文化十五年刊）には、クマノ里楓の「書きそめや古き詩歌の新しき」の句がのっている。

つぎに、和歌については川角村庄屋四郎右衛門の妻むめ（文化九年没）が手習い帳に記したものがわずかに残されており、同女は広島城下の神職野上長門守正重家から嫁したと伝えられる織田家文書。『手習帳』。このほかにも神職・僧侶や、村役人層の人た

中には、種々の教養が及んでいたものと察せられ、世良ヤツ家旧蔵書目録の中に、「大学章句」一巻(寛政八年浪華書林)などのほか「歌之書」二巻(享保十六年写本)・「俳諧をたまき」二巻(不明)があげられているのもその一例といえる『筆の町。熊野誌』

### 学問・教育

後述のように海田市の儒者加藤友徳の弟子矢野村尾崎八幡宮神職香川将監によって実施された社倉法が、まず押込村に広まり、ついで熊野七郷にも及んだことと関連して、儒学ことに神儒学が伝わったと思われるが、そのことは明らかでない。なお、海田市・奥海田などへの心学の教化も、熊野盆地へは波及もしなかつたらしく、庶民教育としての寺子屋などについても、隣接の矢野・奥海田両村にはかなりの数が知られているのに『広島県矢野町史』上巻、海田町史』通史編、当地域にはそれが伝えられていないのは『日本教育史』資料』第九巻、寺社の火災などで関係の資料が失われたためか、あるいは土地の子弟が矢野・奥海田・海田市などに通学したゆえかと思われる。